

王寺町

おらがまち

王寺町観光協会・王寺町商工会1969年発行

おらがまち

史蹟観光



奈良県王寺町観光協会

王寺町商工会

片岡の里の紹介

大和路の車窓から眺める「あしたの原」の美しい姿は、古くは「古事記」「日本書紀」「万葉集」にもいいしれぬ上代人の感傷をそそつたことがしのばれる。当町の西南一帯の丘陵は片岡山と呼ばれ早くから歌名所となつている。その中の一つに「片岡のあしたの原をすぎ行けば山時鳥今ぞ鳴くなる」歌聖柿本人麿も「あすからは若菜つまむと片岡のあしたの原はけふぞやくめる」この丘陵には延喜式内社片岡坐神社や人皇第七代孝霊天皇片岡馬坂陵があり、中世においては南朝の忠臣といわれた片岡八郎もこの地の郷土でもあつた。

一方、曲流する大和川に東北西の三方を囲まれている久度の里は鎌倉時代に環濠聚落が形成され土地の豪族堀内氏がこれに占居したことがうかがわれるとともに、元は平群郡に属し延喜式神名帳及び統紀延暦二年に「平群久度神社」とある久度神社がある。

その神域を中心として現在大和川堤には当時を偲ばせるに充分な板並木が近郷近在の人々の心の支えともなっている。



あした池より片丘馬坂陵の遠望





片岡山達磨寺本堂（臨濟宗南禅寺派）

片岡山・達磨寺

達磨寺は臨濟宗南禅寺派で片岡山達磨寺と称し、永禄年間の兵火に堂宇は焼失したが、豊臣秀頼により再建された。丹碧の華々しさはないが、今なお老松の中におのずから由緒深い優雅なたたずまいを有している。

達磨大師像

達磨寺の本尊で我が国最初の達磨であり、日本一の称がある。木彫着色で「刀法靈妙線条穩健」後代の追従を許さぬ逸物である。全体からいうとよく写実の境を脱脚して理想の域に達している。



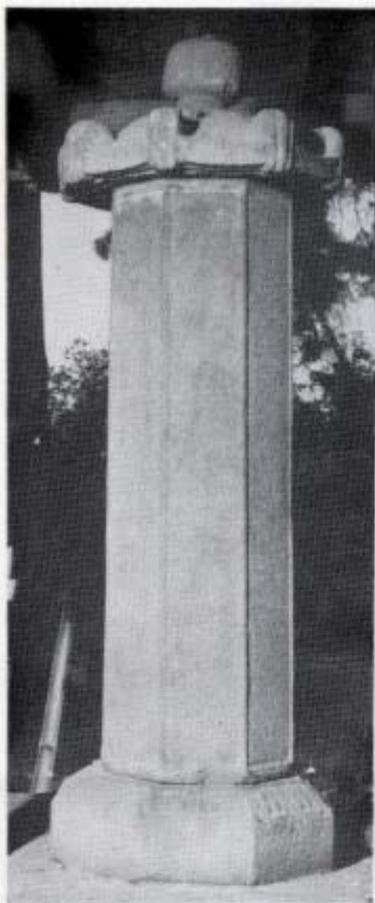
彫刻本尊木造達磨大師像（重文）

聖徳太子像

鎌倉時代建治中の傑作で法隆寺聖霊院の御像とともに太子像中の白眉である。



彫刻木造聖徳太子坐像（重文）



達磨寺中興記幢



一夜竹

一夜竹

伝説では達磨大師が竹杖をここに挿したところ一夜で芽を出したと伝えられている。

達磨寺中興記幢

八角形の断面のある石柱で永享七年京都南禅寺の惟肖和が達磨寺の沿革を記し文安五年住僧南峰祖能の彫刻したものである。



片岡山放光寺(黄檗宗)





放光寺不動堂石造不動明王像

片岡山・放光寺

人皇第三十代敏達天皇の勅願所にして同帝第三皇女片岡姫の建立と言われている。

金堂、食堂、舍利殿、経蔵、鐘楼、法殿、回廊、洪門など一大伽藍であつた。

しかし永承元年、六年の電火と永祿十年松永久秀の兵火によりほとんど焼失した。その後徳川時代（元禄）の頃、当時禪宗の一派として中国より伝来する黄檗宗の名僧鉄牛禪師の再興により片岡の里に光を放つたが、現在では小堂宇のみとなつている。

孝霊天皇片丘馬坂陵

人皇第七代孝霊天皇は「おゝやまとねこひこふとにのみこと」と申して孝安天皇の御子で26才にして皇太子に立たせられ、都を今の磯城郡田原本町黒田に遷された。

延喜式の諸陵寮には「黒田盧戸宮御宇孝霊天皇。在大和国葛下郡兆域東西五町。南北五町。安戸五畑」とあらわされている。



孝霊天皇片丘馬坂陵



松香石 七重塔



永福寺前庭(送迎)

永福寺・松香石七重塔

王寺町畠田送迎の浄土宗永福寺境内の七重塔は高さ約3.5mあつて昔の火山、二上山系から出る。松香石を使つており、塔のやわらかいそり具合からも平安時人の作品とみられる。この様に松香石を使つた石層塔は、二上山のふもとの北葛城郡内でも2、3基あるのみで、しかも七重塔という高さのものはない。

塔の相輪は後世のものがつけられているが、もう一、二重高かつた可能性もある。

永福寺観音堂地藏菩薩立像

高さ約93cm一木彫で顔の様子や衣紋の長さから藤原時代のもので形の整つた重文クラスのものである。別名として子育地藏とも呼ばれている。



地藏菩薩立像



品善寺薬師如来

檜材素地仕上、着首、底塞内刺の吉野時代の手法を如実に見せる工作があつて、その胎内銘によつて価値を高めている。銘には「椿井舜慶民部公」とあり、南都仏所の有力仏師で彼の26才の時の作品であり、鎌倉時代の強烈な作風はないが北円堂弥勒仏を参考にした手法がみられる。その他に当品善寺には藤原前期の作と考えられる。阿弥陀如来坐像や仏身一尺の鎌倉時代前期の作と考えられる涅槃釈迦臥像が安置されており、法隆寺と岡寺等にあるのみで貴重な存在である。



品善寺薬師如来坐像（大田口）



西安寺址（母戸神社）

※出土古瓦からみれば最も盛大をきわめた頃は白鳳時代で、以降奈良、平安、藤原、鎌倉、室町時代の文明年間にまで続いていたことが春日文書にうかがわれる。

西安寺址

西安寺は別名久度寺と言われ、その草創は聖徳太子と伝えられている。私註抄には太子建立48院の第17番目に数えられ太子伝見聞記には第14番目に数えられている。寺跡よりの※



西安寺礎石（王寺町役場前）



久 度 神 社

久 度 神 社

片岡神社と同じく延喜式神名帳に記載されていて、古くから「かまどの神」として信仰を集めてきた。

この久度神社の一带には御殿の芝、駒止の芝、堂の芝、御幸の道、紅葉瀬、的場など名勝古蹟の地名が多く、中でも的場は久度神社の的場行事のあつたところと伝えられている。

片 岡 神 社

延喜式の神名帳には「片岡ニ坐ス神社」とあり、平安朝の初期～中期には少なくとも雨の神として尊信されていたことには間違いない。至寺附近で言えば竜田神社、広瀬神社など、現在大和地方有数の神社の中でもトップクラスと言ってもよい。



片 岡 神 社



六斎念仏碑（乳かけ地藏内）

六斎念仏碑と乳かけ地藏

王寺町畠田（小黑）の太子道の道路側に文斎念仏の石碑がある。それには「南無阿弥陀仏」と六字名号を刻み、右側に「慶長女季」左側に「7月15日」下に「六斎念仏講道全」の六字が読まれる。

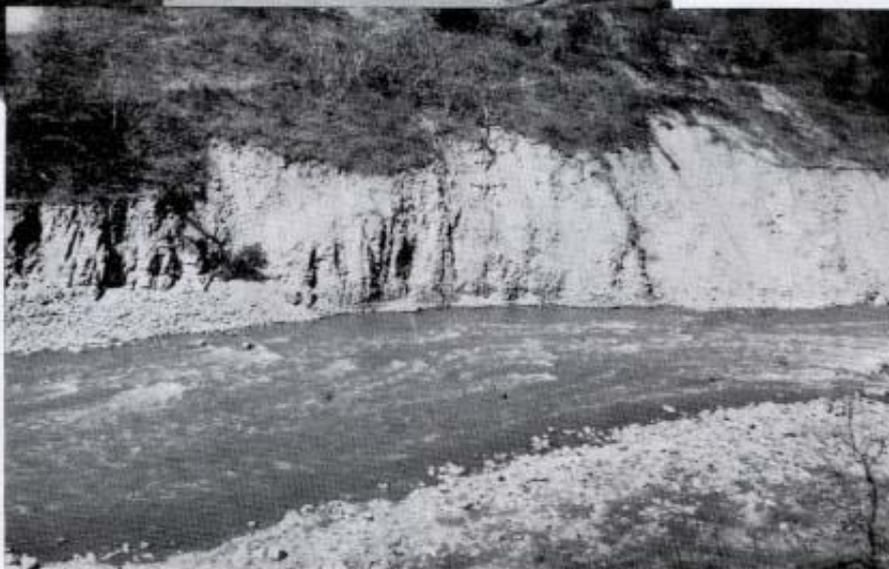
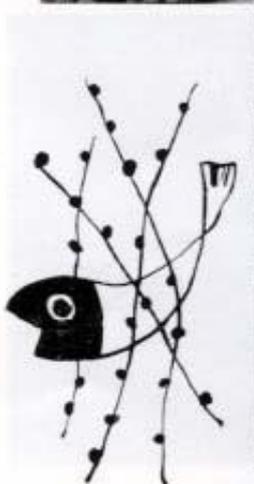
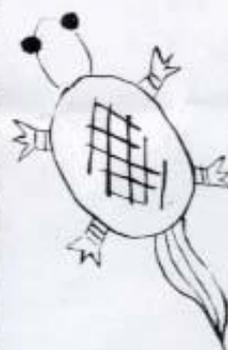
これらの碑の傍に乳かけ地藏があつて伝説では推古天皇がはじめ18才で敏達天皇の皇后となられ、皇女片岡姫をお生みになつたが、御乳が充分出なかつたのでこの地藏さんに御祈願されると御乳がよく出たと伝えられている。村の古老の語るところでは昭和の初期まで子宝にめぐまれ御乳がよく出るようにと祈願される人々にぎわつたということである。

亀の瀬

昭和6年11月大阪府下堅上村峠（現・柏原市）の北部の山腹に亀裂が各所に生じ、次第に拡大してついに約33万 m^3 が南方大和川に向かつてこり出し、大和川の河底及び現王寺町藤井領の道が隆起し大混乱が起つた所である。

この亀の瀬を水運の歴史の面で見ると慶長6年片桐且元が平群領内で2万石余の領地を得た時その米を運ぶため亀の瀬の岩盤をとりぞぎ舟を通ずるようにしたに始まり、徳川時代より明治の中頃に至るまで上り舟は肥料と塩、下り舟は奈良盆地産の米、雑穀などであつた。

亀の瀬第二トンネル附近



亀の瀬北岸（王寺町藤井領より望む）



大和川堤防桜並木(王寺町久度附近)



明神山

明神山は海拔 \uparrow 279.4mであつて、金剛山脈の最北端に位置し、北端は急傾斜をなした大和峡谷となつて信貴山と相對している西側には大阪府に属し南側は寺山(293.5m)鉢伏山(213m)二上山(474.2m)に連らなつてゐる。

特に最近若い人達の絶好のハイキングコースとなつてゐる。それとともにこの山の注目すべき点はガンビ「雁皮」と呼ばれる紙の原料となる植物が群成してゐる。



明神山(信貴・生駒連峰を望む)

明神山頂水神社

西山の明神さんと呼ばれ、河内の境に近い明神山の三角点の東南数米の広庭を前に東面する小祠があり、古びた木の鳥居が立つてゐる。祭神は水波能咩命(みずばめのみこと)すなわち水神で、畠田全体の神様としてあがめられてきた。



水神社(明神山頂~送迎)

王寺達磨さん

作詞 酒井雨虹

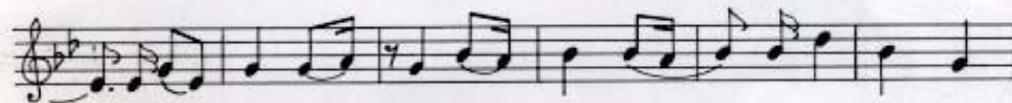
作曲 町田嘉章



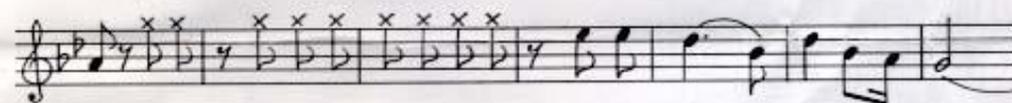
かねの ふるかぜ どこから ふきやる しぎと いこまの



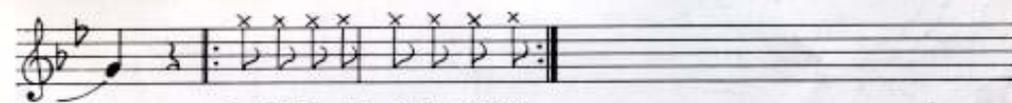
(ヨ) やま か ー ら ふきや(ア) る おおーじー



ーだるーまのー おきやア がりーーだるま (ア)



の (ソラ) ムコウ ハチマキ ふり わ ー けエエてー



ー ムックリムックリ おきアがる

新民謡 「王寺達磨さん」

- 一、金の降る風 どこから吹きやる
信貴と生駒のヨ 山から吹きやる
王寺達磨の 起き上り達磨の
ソリヤ向う鉢巻 振り分けて
(囃子言葉) むつくり むつくり 起き上る
むつくり むつくり 起き上る
- 二、王寺三本橋 扇子と見れば
描いた墨絵がヨ 信貴山 龍田
町は末広 川は末広
ソリヤ駅は 玄関堂どこ
- 三、王寺祭りは おそろい祭り
久度と片岡ヨ 両がけ祭り
囃子や太鼓で 帯は太鼓で
ソリヤどこの嫁やら 娘やら
- 四、王寺きやしやれ 汽車 バス 電車
いつも工場にやヨ モーターが響く
朝のサイレン 日暮れのサイレン
ソリヤ工場くんに 立つけむり
- 五、王寺放光寺 十七夜の晩は
月も輪に照る 数珠をくる
山はしな照る 町はしな照る
ソリヤ金の茶釜さ 誰が埋めた
- 六、王寺や大和の日の 入るところ
音はすれどもヨ 芒の穂風
二つごころか 浮気ごころか
ソリヤ枝は河内に 葉は大和
- 七、信貴で精進 王寺であげて
ブラリ本町ヨ 湯上りすがた
赤いすゞらん 青い螢光灯
ソリヤお山をろしが そよそよと

